

「ママ友」の友人関係と通信メディアの役割

ケータイ・メール・インターネットが展開する新しい関係

研究開発室 宮木 由貴子

目次

- | | |
|-----------------------|----|
| 1. 研究の背景と目的 | 5 |
| 2. 育児中の母親の友人関係 | 7 |
| 3. 「ママ友」と通信メディア | 10 |
| 4. 通信メディアとママ友関係の現状と今後 | 13 |

要旨

孤立しがちといわれる現代の育児中の母親が、友人関係の構築や関係維持に通信メディアをどのように活用しているのか、通信メディアの利用によって何が変わるのか、その利点と欠点について明らかにすべく、調査研究を行った。

育児中の母親は、友人関係を強く求めつつも、出会いの機会や物理的・時間的制約から十分な友人関係を構築できないと感じているケースが多い。一般に育児中は子どもを介した友人関係(ママ友)が不可欠とされがちだが、ママ友がないことのみならず、ママ友がいる人においてママ友間で起こるトラブルもストレス源となっている。ママ友が「子どもを介した」間接的な関係をベースにしていることが関係を複雑化させているようだ。

アンケート調査によれば、友人に対する意識、ママ友に対する意識は年齢によって異なる。無論個人差もあるが、全般的に年齢が高くなるにしたがって新しい友人作りに対しては慎重になっている。

通信メディアの利用の度合いや感覚も年齢によって差がある。さらに利用者間や通信メディアに対して肯定的な人の中でも、コミュニケーションの仕方や頻度の“常識”が人によって異なり、共通のルールや使い方というものが存在しない。

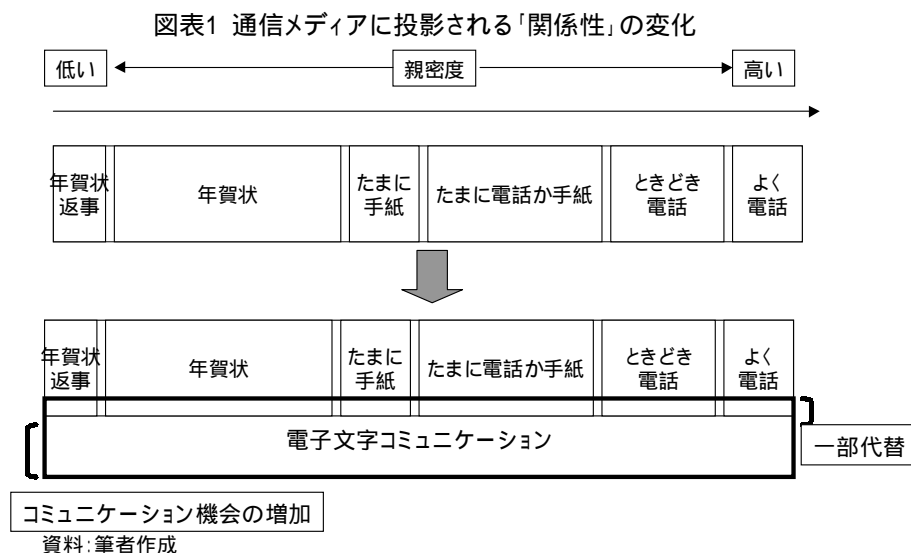
通信メディアはママ友の物理的状況にかなったコミュニケーションツールであるが、ママ友に対するとらえ方の差異と、通信メディアの多様化は、新たなコミュニケーションギャップを生じさせており、いい時はいいが悪い時はより関係性が悪くなる二極化のリスクを高めている。

キーワード：ママ友ネットワーク、友人関係、通信メディア

1. 研究の背景と目的

(1) 通信メディアに投影される「関係性」の変化

筆者はこれまでにメールなどの電子文字コミュニケーションが現代の若者のコミュニケーションにおいてどのような作用があるのかについて研究を行ってきた(宮木,2002)。これについて、これまで通信メディアの種類によってある程度はかることができた親密度が、インターネットや携帯電話¹⁾などのいわゆる「電子文字コミュニケーション」では親密度の強弱にかかわらず利用されている点について言及した。また、電子文字コミュニケーションは、従来型の通信メディアを一部代替しつつ、コミュニケーション全体の機会を増加させていることも明らかにした(図表1)。さらに、電子文字コミュニケーションの普及によって、これまで友人だった人とコミュニケーションをとる機会自体が増加したという結果に加えて、「電子メールならではの関係」も確認された。



(2) 調査対象としての育児中の母親

これまで筆者は通信メディアの利用に関し、「若者」として16~29歳に該当する者を主な研究対象として扱ってきた。この世代のコミュニケーションの大きな特徴としては、友人関係が生活の大きな部分を占めていることが多い、友人関係を維持するのに効果的な「特定の人との接触の必然性」が高い、友人関係を維持するのに必要な時間・金銭的余裕が比較的あるといった点があげられる。

これに対し、友人関係を構築するニーズが高い、しかし友人関係の構築の機会と関係維持のためのフレキシビリティが低いのが育児中の母親世代である。

育児中のネットワークの有効性について、既存研究によれば、「父親の育児参加が

多く、世帯外の育児ネットワークの規模が大きく、親族割合と密度が中程度であるときに、育児不安度が低く、生活満足度が高い」とされる（松田,2002）。また、親たちに多様なサポート（手助けや心理的支援）を提供してくれる人たちとの関係ネットワークが、子育て上の不満や満足、心理的な幸福感や健康状態に影響を与えるとされている（野沢ら,2002）。子育て支援においては、親同士をつなげ、孤立した親子をなくすことがひとつのキーポイントともされる（原田¹²,2003）。

しかし、実際に育児中の母親が新しい友人関係を構築する、ないし友人関係を維持していくことは容易でない。その理由としては、「育児中の母親は生活上の拘束時間が増えるため、生活環境が異なる旧来の友人との対面コミュニケーションの機会が著しく減少する」「しかし、学生や就労に専念する女性と異なり、育児中の女性は新しい人間関係に接触する必然性が低く、友だち作りが容易でない」「新たにできる友だちは子どもを媒介していることが多く、厳密には『子どもの友だちの母親』という関係である。子どもを名目とした消極的な関係も多い」といった点があげられる。

これらの点からみて、育児中の「友人関係」は、この時期の女性特有の特殊な対人関係といってもよい。育児ストレスは、子どもの虐待につながるなどの指摘が多く、現に児童相談所における児童虐待に関する相談処理件数は増加傾向にある。これらは、核家族化や都市化、就労女性が増えたこと等による人間関係の希薄化によるところが大きいとされる。近年、自治体などによる子育てネットワーク作りなどが推進されているが、これらも母親のストレスによる虐待防止を大きな目的としているともいわれている。

(3) 育児中の母親の友人関係と通信メディア

一般に友人関係は、最初の関係構築の後、関係維持の過程で振り分けられ、合う友人、合わない友人として関係性が継続ないし断絶し、継続する場合にも関係の濃淡が生じてくるものだが、子どもを介した母親の友人関係の場合、一概に母親同士の感情だけで友人関係の強弱を規定できない。そこには、母親とペアで関係を構築している子ども同士がいるからである。これらの点からみられるように、育児中の母親における「友人関係」は、この時期の女性特有の、非常に特殊な対人関係といっていよう。本研究では、このような育児期の友人関係を「ママ友」と定義づけて扱うものとする（以下、育児期の友人関係を「ママ友」と表記する）。

友人関係の構築と維持においては、関係構築の場や機会と、関係を維持するための通信メディアがキーワードとなる。従来の育児中の母親の関係構築の場・機会としては、公園、児童館、各種子ども教室などといったものがあげられる。関係維持の手段としては、これまで加入電話か手紙といったものしかなかった。それが、現代は新たな通信メディアの登場により変化しつつある（図表2）。

今日の通信メディアの多様化は、時間的・機会的に極めて限定的な環境にある育児

中の母親の友人関係において、様々な局面での変化を生じさせているものと推察される。通信メディアの多様化と浸透はコミュニケーションの「手段」の増加であり、これによってコミュニケーションの機会と頻度も増加する(宮木,2001)。このような、育児中の母親を対象とした通信メディア利用の研究は、若者のそれに比して不十分である。これらの点から、コミュニケーションへのニーズが高いにもかかわらず、物理的・時間的制約からコミュニケーションが困難ないし不十分になりがちな育児中の母親について、その実態と通信メディアの役割を明らかにすることを目的として、調査研究を行った。

図表2 育児中の母親の関係構築の場・機会と関係維持の連絡手段としての通信メディア

	従 来	現 在
関係構築の場・機会 (ファーストコンタクト)	公園、児童館、各種子ども教室(スイミングなどの習い事を含む)、育児サークル、病院の待合室	+ インターネット(ホームページ上などでの出会い)
関係維持の連絡手段 (リレーションキープ)	加入電話、手紙	+ 携帯電話、電子メール

2. 育児中の母親の友人関係

(1) 調査概要

本研究では、ママ友と通信メディアの利用に関してアンケート調査を行った。調査の概要は以下の通りである(図表3)。

図表3 調査概要

調 査 概 要	調査地域と対象	全国の0～6歳の子どもを持つ母親	
	サンプル数	696名	
回 答 者 属 性	サンプル抽出方法	第一生命経済研究所生活調査モニターとその家族協力	
	調査方法	質問紙郵送調査法	
	実施時期	2003年9月	
	有効回収数(率)	631名(90.7%)	
	年齢構成	24歳以下	1.6%
職 業		25～29歳	12.8%
		30～34歳	38.3%
		35～39歳	35.8%
		40歳以上	11.3%
		専業主婦	61.8%
		会社員・公務員・団体職員(正社員)	5.5%
	自営・自由業(家族従業員を含む)	2.0%	
	パート・アルバイト・派遣社員・内職	29.4%	
	その他	0.8%	

注：「不明」を省略してあるので合計は100.0%にならない
対象者は未就学児のいる母親とした

(2)「ママ友」の存在

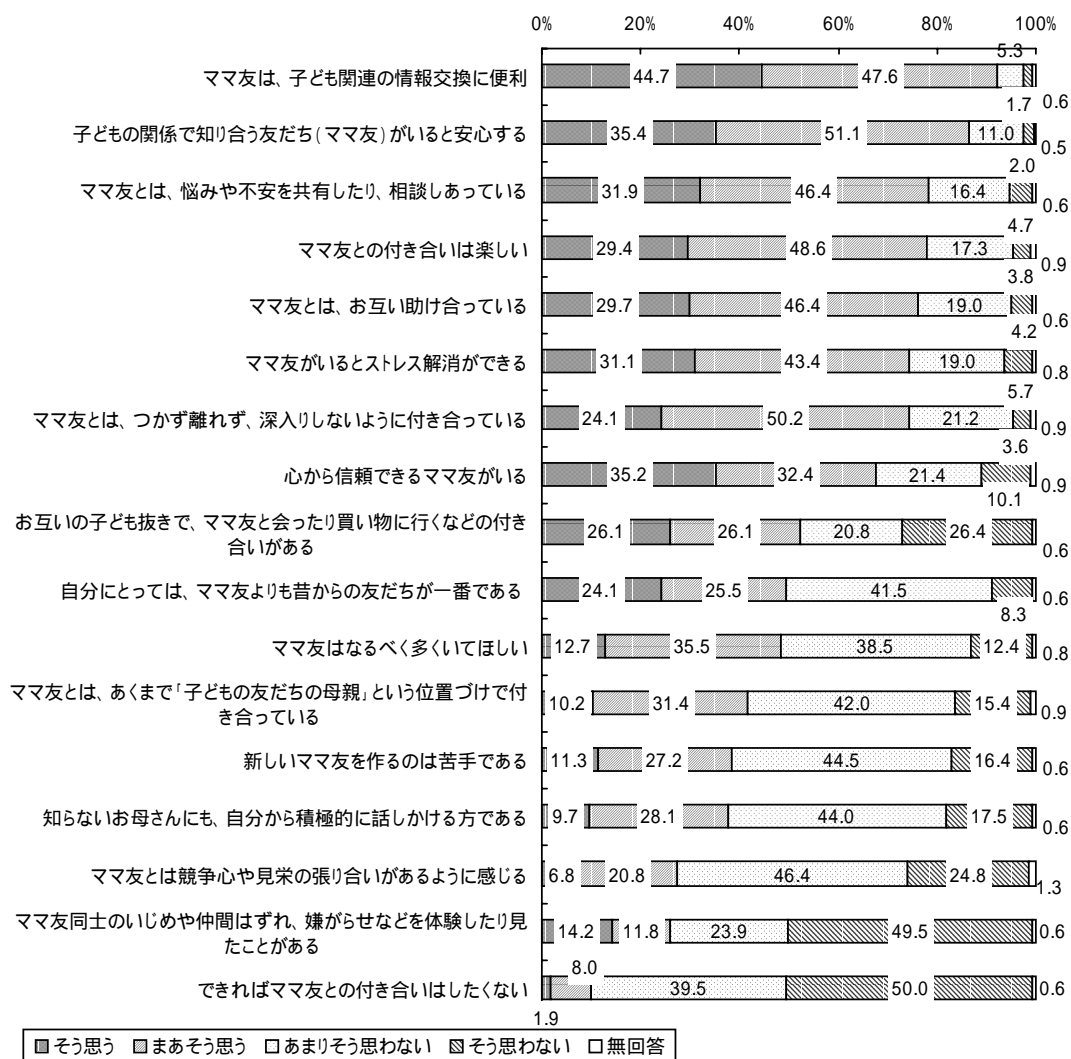
1) ママ友に対する考え方

育児中の母親同士が友人関係を構築することの効果としては、「育児に関する情報入手」「育児不安の解消・悩みの共有」「ストレス発散・気晴らし」「時間の融通・助け合い」「子ども同士が集うことの発育への刺激・効果」などがあげられる。

ママ友に対する考え方を尋ねたところ、「情報交換に便利」とした割合は「そう思う」と「まあそう思う」の合計で9割を超えている(図表4)。「安心」「悩みや不安の共有」と回答した人も多かった。

ママ友は、母親本人の年齢というよりは、子ども同士の年齢の近さによって集うことが多いため、晩産化の進む今日、母親同士の年齢差がかなりあるケースも少なくない。年齢別にママ友に対する意識をみたところ(図表省略)、若い世代では「ママ友

図表4 ママ友に対する考え方(全体)



はなるべく多くいてほしい」としているのに対して、年齢が高いと「ママ友は、あくまで『子どもの友だちの母親』との割り切りをしている様子も明らかになった。年齢差による考え方の相違に加えて、個人の価値観の違いがあることを鑑みると、「ママ友」のとらえ方は人によってかなり違うといえる。

フリーアンサーやヒアリングの回答でも以下のような意見がみられている。ママ友を支持する意見、否定する意見など様々な中、全体を通して、収入格差や服装の違い、価値観・しつけ観の違い、子どもの性差、しかり方などの違いで付き合いがしにくいとの意見が多かった。これは、「ママ友」という、一種の友人関係を構築しながらも、通常の友人選択のプロセスを経ることができていないことが原因のようだ。また、ママ友が切望されるのは1人目出産後であることも指摘された。このような特殊な友人関係において、通信メディアはどのような効用を持ち、問題点を内包しているのだろうか。

- *自分だけだったら、付き合わないような人とも子どものことがあるから付き合いなくてはならなかったりすると初め頃は辛かった(30歳)。
- *子ども同士が仲のいいときはいいのだが、仲が悪くなって「ちゃんとは遊びたくない」とか言い出した時に親同士の付き合い方が難しくなることがあった(32歳)。
- *ママ友との付き合いは一時的なものと割り切っている(32歳)。
- *子育て中の私にとってママ友という存在はなくてはならない大切なもの。いつも身近にいてお互い助け合ったり、相談できたり子どもの話以外もできるので、ストレス発散にもなるし頼りにもなる(36歳)。
- *「子どもの友だちの母親」というよりは「私の」友人という、とてもよい関係の友人が2人います。これは本当に財産で、友人のおかげでストレスもほとんどないといえます(31歳)。
- *真夜中の授乳中に、同じ時間に授乳している友人の存在をメールで確認してカブけられた。

2) ママ友の人数

ママ友の人数についてみると、かなりばらつきがあることがわかった。平均的な人数は9.2人で、そのうち特に仲良くしているママ友の平均人数は3.0人という結果となっていた(図表5)。年齢が高く、子どもの数も多い方が必然的にママ友の数も多いという傾向がみられた(図表省略)。

図表5 ママ友の人数

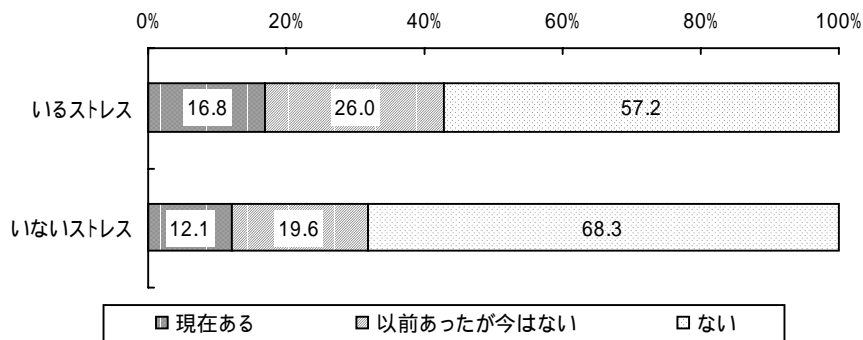
子どもの関係で知り合って付き合いしている「ママ友」 (%)	0~4人	5~9人	10人以上	平均値
	31.4	26.5	42.1	9.2人
特に仲良くしている「ママ友」 (%)	0~1人	2~3人	4人以上	平均値
	28.1	41.1	30.8	3.0人

3) ママ友とストレス

ママ友はしばしばストレスの種とされるが、ママ友はいること・いないこと(「不十分」を含む)の両者がストレス源となる。これについて両面から尋ねたところ、マ

ママ友がいることによるストレスについては「現在ある」とした人が16.8%、ママ友がいない・不十分であることに対するストレスについて「現在ある」とした人は12.1%となっていた(図表6)。年齢別に目立った差はみられなかったが、子どもの数が多くなるとママ友が「いるストレス」が高くなる傾向がみられた。

図表6 ママ友がいるストレス、いない(もしくは不十分な)ストレス



(単位: %)

	母親の年齢		子どもの人数		
	34歳以下	35歳以上	1人	2人	3人以上
「ママ友」がいることによるストレス	15.7	16.3	13.1	16.5	22.2
「ママ友」がいないことによるストレス	13.3	10.2	11.5	11.9	13.6

注: 「現在ある」の割合

3. 「ママ友」と通信メディア

(1) 利用実態

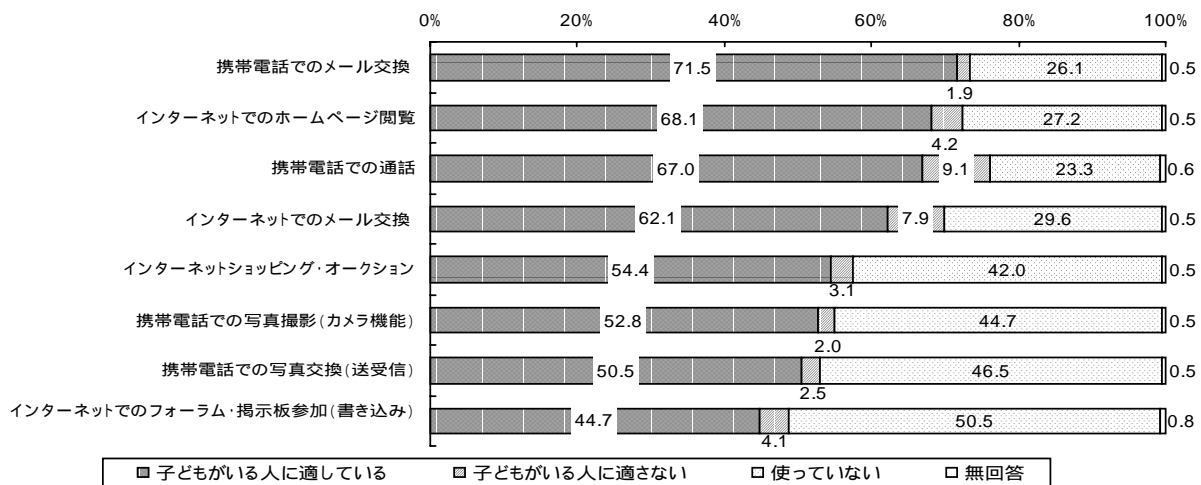
1) 利用感と非利用者の割合

通信メディアの利用状況について尋ねた。

インターネットのホームページ閲覧で27.2% / メール交換で29.6%、携帯電話での通話で23.3% / メール交換で26.1%が「使っていない」と答えており、未就学児を持つ母親のほぼ7割から8割がインターネットや携帯電話を利用していることが明らかになった(図表7)。

「子どもがいる人に適している」とする割合が多かったのは、上位から「携帯電話でのメール交換」「インターネットでのホームページ閲覧」などとなっており、通話より文字・画像による情報交換の支持が高かった。携帯電話での通話は、利用者が多いにもかかわらず、「子どもがいる人に適している」とした割合が低い。

図表7 通信メディアの利用感と非利用者の割合



2) コミュニケーション手段の優先順位

通信メディアに対面会話を加え、コミュニケーション手段の優先順位を尋ねたところ、最も上位にあげられたのは対面会話となった(図表8)。これに「家の電話での会話」が続いており、重視度としては「会話」が高い位置を占めていることがわかった。携帯電話については、会話よりも電子メールが上位にあげられており、携帯電話は会話手段としてよりはメールツールとしてとらえられている様子が明らかになった。また、パソコンを使った電子メールは携帯電話を使ったものより下位に位置していた。

図表8 コミュニケーション手段の優先順位

順位	項目	平均値	順位	項目	平均値
1位	実際に会って話すこと	1.7	5位	パソコンを使った電子メール	5.0
2位	家の電話での会話	2.8	5位	郵便での手紙・ハガキ	5.0
3位	携帯電話・PHSを使った電子メール	3.7	7位	ファックス	5.4
4位	携帯電話・PHSでの会話	4.5	8位	チャット	7.7

注:「平均値」はあげられた順位の平均

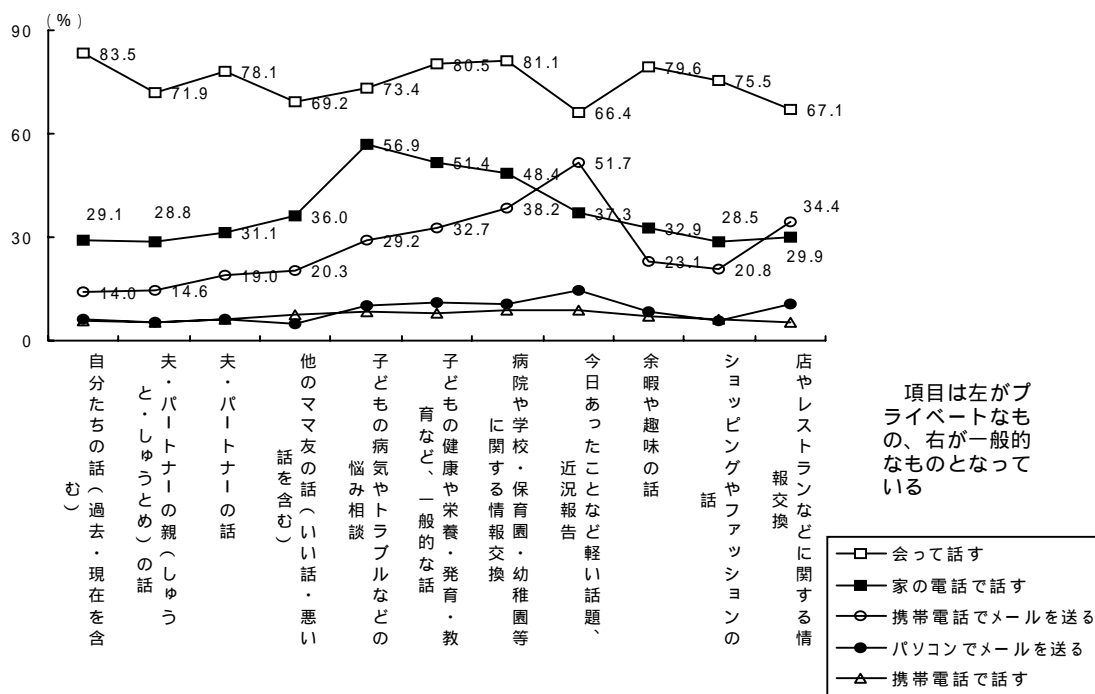
3) 話題と通信メディアの利用状況

続いて、話題別に通信メディアの利用状況をみた(図表9)。

自分や家族の話や子どもに関することは、「会って話す」とした割合が最も多かった。また子どもに関することで、特に病気やトラブルなど急を要する内容だと家の電話で会話をする割合が高い。一方、今日あったことなど軽い話題については携帯電話でメール交換を利用する人が多かった。パソコンでのメールや携帯電話での通話はいずれの話題でもあまり利用されていない。育児中の母親は、基本的に会って話すコミュニケーションを重視しながら、急を要する時などには家の電話でも会話をし、一般

的な情報交換については携帯電話のメールを多用している実態が明らかになった。

図表9 話題別通信メディアの利用状況



(2) 友人関係と通信メディア

さらに、通信メディアに対する考え方について尋ねた(図表10)。

34歳以下と35歳以上を比較すると、全般的な傾向として35歳以上では通信メディアの利用自体が少ない。また通信メディアに対するイメージや評価が低く、通話を重視する傾向がある。年代によって通信メディアに対する感覚が異なる様子がここでも確認された。

また、全体的には、インターネットでの情報収集というよりは、電子メールでの対人コミュニケーション面での活用が多いことがわかった。電子メールや電話での対人コミュニケーションはストレスや不安の解消に役立っていることも明らかになった。

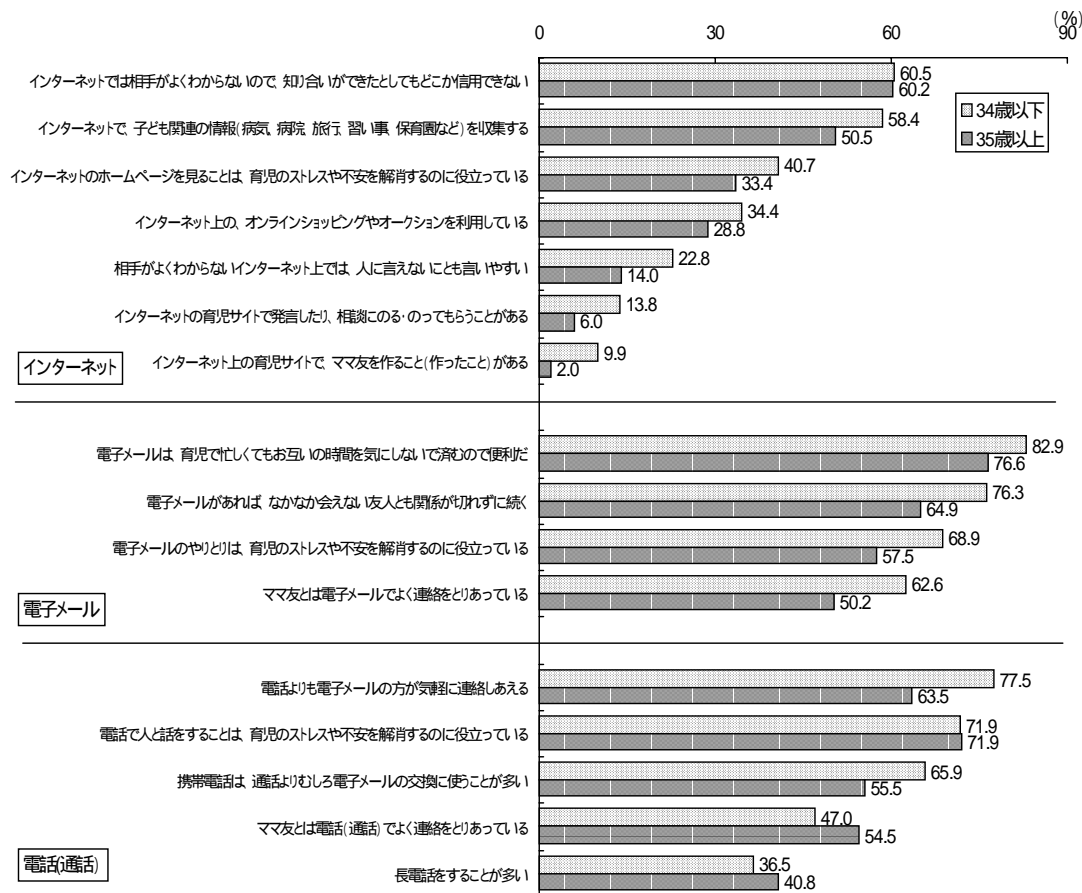
個別にみていくと、まずインターネットについては、「インターネットでは相手がよくわからないので、知り合いができたとしてもどこか信用できない」が6割を占めた。また、インターネットを子ども関連の情報収集に活用している人も過半数を占め、特に34歳以下の母親での利用が多かった。

電子メールについては、「電子メールは、育児で忙しくてもお互いの時間を気にしないで済むので便利だ」が34歳以下で82.9%、35歳以上で76.6%を占めた。また、「なかなか会えない友人とも関係が切れずに続く」「育児のストレスや不安を解消するのに役立っている」など、34歳以下ではいずれも7割前後が肯定した。

電話での通話との比較においては、「電子メールの方が気軽に連絡しあえる」が34

歳以下で77.5%もいるのに対して、35歳以上では電話での通話を支持する割合が34歳以下より多かった。

図表10 通信メディアに対する考え方(母親の年齢別)



4. 通信メディアとママ友関係の現状と今後

(1) 「ママ友」と「通信メディア」におけるダブル・ギャップ

以上、通信メディアの利用とママ友関係について考察してきた結果をまとめる。

一般にママ友は、母親本人の年齢ではなく子ども同士の年齢で集うケースが多いため、ママ友間の年齢幅があり、普通なら付き合わない年齢層とも付き合う必要が生じる。さらに、ママ友は子ども関連の出会いの必然性から集うケースが多いことから、ママ友自身の価値観は友人関係構築の前提とならない。調査結果から、友人に対する意識は年齢によって異なることが明らかになった。全般的に年齢が高くなるにつれて新しい友人作りは慎重になっていく。ヒアリングなどからも、初対面から馴れ馴れしかったり親密そうに近づいてくる人には警戒心を抱くとの意見がみられた。実際、マ

ママ友関係を利用した訪問販売や、各種団体への勧誘といったことも行われており、子どもや若者のようにオープンに友人関係を構築できない側面がうかがえた。

また、ママ友に対してはママ友を自分の友人とするポジティブなとらえ方と、あくまで子どもの友だちと割り切るケースを含めたネガティブなとらえ方に大きく二極化している。ママ友関連で一度嫌な経験をしてしまうと、付き合いを完全に排除できない都合上、割り切ってドライに付き合うという開き直りをするようだ。さらにママ友が切望されるのは1人目の子どもの時で、単に同じくらいの子がいるからといって相手が同じようにママ友を求めているとは限らないことも明らかになった。これに個人的特性を加味すると、「ママ友」に対する考え方は非常に多様であるといえる。

一方で、現代の通信メディアはママ友の時間的・物理的状況にかなったコミュニケーションツールである。しかし通信メディアに対する利用の度合いや感覚も年齢によって差があることが明らかになった。こちらもとらえ方や考え方に個人差もあるのだが、さらに通信メディアを利用している人同士や通信メディアに対して肯定的な見解を持つ人の間でもコミュニケーションの仕方や頻度の“常識”が人によって異なり、共通のルールや使い方というものは存在しない。ヒアリングからも、「自分は夜、1日1回パソコンでメールチェックをするが、昼間携帯電話から送られたメールで『これから遊ぼう』などというメールが入っていると、無視されたと解釈されることがある」との意見があった。通信メディアの利用の有無のみならず、個人がそれらをどういった時間的スペースに組み込んでいるかの違いも存在している。

これらのダブル・ギャップ、すなわちママ友に対するとらえ方の差異と、通信メディアに対する感覚の違いは、新たなコミュニケーション障害を生じさせており、いい時はいいが悪い時はより関係が悪くなるといった二極化のリスクを高めている。

また、友人関係の維持における通信メディアの評価が高かった一方で、新しい友人関係の構築における通信メディアのインパクトはそれほど評価されなかった(図表省略)。ママ友における出会いの場としての通信メディアの役割は、期待されたほど高くなかったが、ファーストコンタクト時の後の接触、すなわち初期の関係維持と関係の親密化には大きく貢献しているようだ。

(2) 今後の通信メディア利用とママ友関係に向けて

携帯電話やインターネット、電子メールなどの通信メディアの普及は、家に閉じこもりがちで人との交流が激減しやすい子育て中の母親の対人関係維持に大きく貢献している。気軽な交信手段によってコミュニケーション頻度が高まったことで、母親のストレスが解消されていることは事実である。さらに、「子育て」という新しいステージに立った女性が、多忙な環境下においても既存の友人との関係を維持できるようになったという点についての評価も高い。

しかし一方で、タイムラグがあってもいいはずのメールで即答を強要されているよう

に感じたり、あまりの交信頻度の高さが煩わしくなったりといった新たなストレスも生じさせている。1日1回パソコンでメールを確認すると、携帯電話で即時的にメールで「会話」をする人とは、明らかにコミュニケーションの仕方が異なる。

このような新たなコミュニケーションギャップによるトラブルを解消するために必要なのは、通信メディアの利用における「常識」は存在していないということを確認することである。さらにママ友に対しても、様々なとらえ方をする人が存在する事実を確認しておくべきである。これらが非常に複雑で多様であるという実態は、今回の調査研究によって明らかになった。通信メディアはあくまで「ツール」であり、ツールの両端に人間がいて、「信頼関係」が必要であることを忘れてはならない。安易にママ友を求め、その関係を通信メディアに依存することはかえって危険な関係を招く。自らの「常識」を押し通した結果、生じた誤解や行き違いによって傷ついたという人も少なくない。

確かに、携帯電話や電子メールなどの通信メディアは子育て中の母親には非常に適したコミュニケーション手段である。これによって、現代の育児中の母親の友人関係は大きく変化しつつあるのは紛れもない事実だ。ただし、通信メディアは人間関係そのものを簡単にしたのではなく、構築された信頼関係の上に成り立つものであり、人間関係の維持においてあくまでそのサポートをするツールであるということを念頭に置くことが重要だ。いかにしてこれらを自分の育児生活に組み込むかをユーザー自身が考えることで、もっとその効用を活かし、育児におけるサポートツールとして活用できると思われる。

(研究開発室 研究員)

【注釈】

*1 用語の取り扱いとして、「携帯電話」には「PHS」も含まれるものとして扱う。

*2 日立家庭教育研究所「家庭教育研究所紀要25」2003

【参考文献】

- ・アミーカ, 2001「子育てママのおつきあいマニュアル」メイツ出版
- ・北風祐子, 2001「インターネットするママしないママ」SBP ビジネス選書
- ・小川憲治, 2002「IT時代の人間関係とメンタル・ケアリング」川島書店
- ・野沢慎司, 2002「子育てをめぐる意識・行動とサポート・ネットワーク」社会調査実習報告書 VOL.18
- ・原田正文, 2003「家庭教育研究所紀要25」p22
- ・松田茂樹, 2002「育児ネットワークの構造とサポート力」家族研究年報 No.27
- ・宮木由貴子, 2002「青年層の通信メディアの選択と友人関係 - 音声コミュニケーションと文字コミュニケーション-」LDI レポート
- ・宮田加久子, 2002「Social Support for Japanese Mothers Online and Offline」The Internet in Everyday Life(Blackwell Publishing)